

分科会総括研究報告

分科会長	大阪大産婦人科	倉智敬一
班員	群馬大産婦人科	五十嵐正雄
	東京医歯大産婦人科	斉藤幹
	日本大小児科	馬場一雄
研究協力者	東京大産婦人科	木下勝之
	和医大産婦人科	仲野良介
	長崎大産婦人科	山辺徹
	鹿児島市立病院産婦人科他	外西寿彦他

研究目的

I 多胎妊娠の疫学的研究

今年度の研究目標として以下の項目があげられる。

1. 卵胞発育メカニズムに関する内分泌的研究と多発排卵予防の研究
2. 卵胞発育の血中及び尿中ホルモン測定と超音波断層法によるモニタリングによる多胎妊娠防止に関する研究
3. 多胎妊娠の管理に関する研究

II 多胎児の発育・成長に関する研究

昭和51年1月31日鹿児島市立病院において出生した「5つ子」の発育、成長に関する研究、記録を行なう。

研究成績

多胎分科会では、分担研究、研究協力者により基礎より実地臨床にわたり多方面からの研究がなされ、一定の成果を得たのでここに報告する。

I 多胎妊娠の疫学的研究

まず、HMG投与の前提となる基礎的研究では、仲野らよりFSHの卵胞発育機序についての報告があった。彼らは、下垂体摘出ラットを用いPMS単独あるいはPMS-clomipheneを投与し、卵巢の組織学的検索を行った結果、FSHは卵巢重量を増加し、莖膜細胞層を有する卵胞への発育を促進し、Clomipheneの追加によりその作用が抑制されることから、FSHの卵胞発育促進作用はestrogenをmediatorとしていることを明らかにした。五十嵐らは、HMG-HCG療法における多胎の原因としてprostaglandin, histamineおよびprolactinの関与を想定し、それぞれのantagonistをPMS-HCG投与中の幼若ラットに投与した。その結果indomethacin投与群では排卵数、排卵率はともに用量反応的に減少し、aspirin, chlortrimetonではPMS投与量が少ない時のみ排卵数は減少し、大量のbromocriptine投与でも排卵数は減少したと報告している。さらに彼らはHMG製剤そのものに多胎の原因の可能性を想定し、精製によりFSH dominantな成分を分離し今後使用の予定である。

臨床的な面からは、斉藤、山辺らより主に卵巢過剰刺激症候群(OHSS)防止の面からestrogenモニターにつき報告があった。斉藤らは従来の血中estrogen測定より簡便な尿中estrogen簡易モニター法を開発し有用性を検討した結果60~90 ng/mlでHCGに切りかえればOHSSの発生防止に役立つことを報告した。一方山辺らは同一症例にHMG連日投与方法と隔日投与方法を行ない排卵率の上昇とOHSS発生防止ができたことを報告した。さらに両者において血中FSHを測定し隔日投与の方が自然排卵周期のFSHパターンに近いものが得られ今後検討の余地がある旨報告があった。また山辺らは、HMG-HCG療法において一定のシステム投与方法を行ない超音波断層法によりモニターする研究も行なっているが、血中estradiol値は一断面における卵胞断面積総和と $r = 0.874$ と良い相関を示し、OHSSと排卵を考慮したHCG切りかえ時期は卵胞径15mm以上、断面積総和が8cm²未満と設定している。

実際行なわれている HMG-HCG 治療における超音波断層法による研究は倉智らと木下らが協力して行なった。正常周期ではほぼ前例卵胞は1個発育し排卵後消失するのに対し、HMG-HCG 療法では半数以上の例で卵胞は複数個発育しており、多胎の前段階の複数の卵胞発育を経日的に観察できた。また実症例の観察より排卵可能な卵胞の長径は、正常周期は約20mmをこえるのに対し HMG-HCG 治療周期では15mmであり、この段階で HCG に切りかえても充分排卵、妊娠する可能性があることがわかった。したがって HMG 投与日数を減らし同時に複数の卵胞発育をまたずに HCG に切りかえることができ多胎を予防できる可能性が示唆された。超音波モニター中に両大学で17例の妊娠が成立し、内分けは、品胎1例、双胎3例、単胎13例であった。HCG 切りかえ前の長径15mm以上の成熟卵胞数は、胎児数と一致するか又はそれ以上であった。今後はこの方法でモニターしながら薬剤投与法を工夫し、複数の卵胞発育を抑制するスケジュールにつき研究をすすめる旨の報告であった。

実際に多胎が成立した際の管理につき、斉藤らにより流産防止のための入院安静が平均体重 400 g の増加と在胎日数21日の延長を期待できること、木下らにより、selective β_2 stimulant である ritodrine の使用経験より、早産率と児死亡率の改善をみたとの報告があり、今後の検討が期待される。

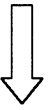
II 多胎児の発育・成長に関する研究

馬場らにより山下家の「5つ子」についての発育・成長に関する報告があり、一般身体計測ではなおやや小柄であるが幼児体力検査では全員標準偏差内にあり、きき手きき足は全員右であり、その他精神発育に関しての細かい報告がなされた。鹿児島市立病院からは当院で出産した徳之島の「5つ子」に関して妊娠成立から分娩後に至るまでの報告がなされた。

今後、多胎発生予防に関する基礎的研究及び胎児の予後を左右する妊娠中の管理、治療についての研究が、各大学でさらにおしすすめられる予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

多胎妊娠の疫学的研究

今年度の研究目標として以下の項目があげられる。

1. 卵胞発育メカニズムに関する内分泌的研究と多発排卵予防の研究
2. 卵胞発育の血中及び尿中ホルモン測定と超音波断層法によるモニタリングによる多胎妊娠防止に関する研究
3. 多胎妊娠の管理に関する研究

多胎児の発育・成長に関する研究

昭和 51 年 1 月 31 日鹿児島市立病院において出生した「5 つ子」の発育, 成長に関する研究, 記録を行なう。